

病院の力 ニッポン 実力

がん治療では、痛みを和らげる緩和ケア、不安や落ち込みなどの心のケアは普及している。また、近年、治療過程で起る吐き気やしびれなどを抑えるケアも重視され、これらをサポートするという。日進月歩で技術が向上しているがん治療では、治療期間が長くなるケースも増えトータルケアが欠かせない。

しかし、緩和ケアは麻酔科医や看護師、心のケアは精神科医、薬の副作用に関しては内科医や栄養士など、バラバラに行われがちだ。しかも、エビデンス(科学的根拠)に基づき共通した方法は、まだ確立されていない。

国立がん研究センター中央病院 支持療法開発センター

この状況を打開すべく昨年1月に発足したのが、国立がん研究センター中央病院支持療法開発センターである。国立がん研究センターに留まらず、多施設共同研究の日本がん支持療法研究グループ(J-SUPPORT)を設立し、緩和ケア、精神心理的ケア、リハビリテーション、栄養療法などの専門家と連携して、臨床研究の実施と新たなエビデンスの創出を目指している。

「患者さんの心身の苦痛を測る方法も、今は施設によってバラバラです。全国共通の方法を見つけることで、患者さんにとって必要なケアや治療が明確になれば、効率的な新たな方法が生まれるでしょう。専門家がオールジャパンで力を合わせるのが重要なのです」

こう話す支持療法開発センターの内富庸介センター長(57)＝顔写真＝は、がん患者

がん治療の緩和ケア、精神心理的ケア リハビリテーションなどの専門家と連携



「がんが見つかったときの心のケアは、精神腫瘍科の医師が行えます。しか



の心のケアを行う精神腫瘍科領域の臨床、研究、プログラムの開発などに長年取り組むスペシャリストである。国内外の支持療法に精通し、以前からオールジャパンの支持療法開発の必要性を訴求してきた。

【データ】

J-SUPPORT臨床研究

- ・化学療法に伴う副作用に対する標準治療の開発
- ・放射線治療に伴う皮膚炎に対する標準処置の開発
- ・看護師主導の治療早期からの専門的緩和ケア介入プログラムの開発
- ・今後の見通しについての医師からの望ましい説明に関する研究

(住所) 〒104-0045 東京都中央区築地5の1の1 電話/03・3542・2511

が、医師にコミュニケーション技術があれば、解決できるでしょう。そういった方法の普及も必要なのです」

内富センター長は、10年前から日本緩和医療学会と日本サイコロジック共催の「コミュニケーション技術研修会」にも力を注いできた。

しかし、来年以降、厚労省の委託事業としての枠組みから離れて、学会独自の自主開催の道を進む。医師の燃え尽き予防にもつながるため、開催継続に準備を始めているという。

「がんと告知される方は年間100万人に上ります。支持療法が求められる中で、私たちが患者さんのために成すべきことは多い。臨床研究の成果を上げることで、医療の効率化や医療費削減などにも貢献したいと思っています」と内富センター長は話す。

有益な支持療法開発に奮闘中だ。(安達純子)